

—グラフィア—

腎盂癌後腹膜リンパ節転移症例の化学療法効果判定に FDG-PET/CT が有効であった 1 例

戸山 友香 野村俊一郎 鈴木 康友 近藤 幸尋

日本医科大学泌尿器科

Efficiency of FDG-PET/CT for Evaluating the Effectiveness of Chemotherapy for Renal Pelvic Cancer with Lymph Node Metastasis: A Case Report

Yuka Toyama, Shunichiro Nomura, Yasutomo Suzuki and Yukihiro Kondo

Department of Urology, Nippon Medical School

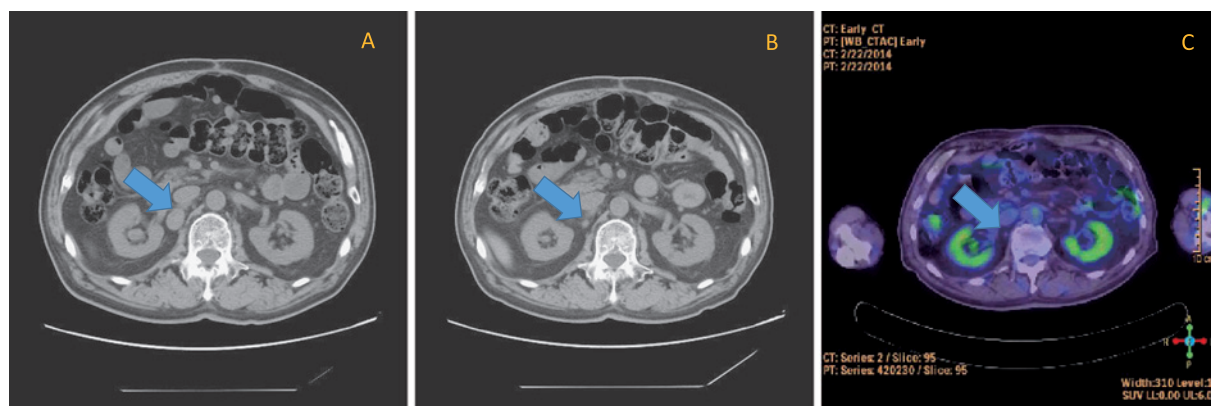


Fig. 1

FDG-PET はグルコースのアナログである ^{18}F -FDG (fluorodeoxyglucose) の組織内集積を観察する画像診断であり、様々な領域のがんの画像評価として幅広く用いられている¹。今回腎盂がん後腹膜リンパ節転移症例の化学療法効果判定に FDG-PET/CT が有効であった一例を経験したので供覧する。

症例は 78 歳男性、腹部 CT で腎盂腫瘍を指摘され当科受診。精査後右腎盂腫瘍後腹膜リンパ節転移と診断。右腎門部リンパ節は最大 20.2 mm に腫大していた。ゲムシタビン、カルボプラチンによる化学療法 2 コース施行後の腹部 CT で右腎門部リンパ節は 8 mm に縮小、FDG-PET/CT でも集積を認めなかった。傍大動脈リンパ節は初診時より明らかに有意な腫脹とは言い難いものの化学療法施行後の FDG-PET/CT では SUVmax6.1 と高集積であり、活動性病変の存在が疑われた。この結果を踏まえ開腹右腎尿管全摘膀胱部分切除術、後腹膜リンパ節郭清術を施行。病理所

見では papillary urothelial cancer G3 pT3 の右腎盂癌、右腎門部リンパ節には癌細胞を認めないものの傍大動脈リンパ節にはほぼ全体に癌細胞を認め、化学療法の治療効果を認めないとの診断であった。

尿路上皮癌において尿路に接した病変の評価は、尿中に排泄される ^{18}F -FDG-PET の影響を受けるために困難とされているが、リンパ節転移や遠隔転移の評価においてはその有用性を見いだせるのではないかと報告もある。Gianna-tempo らは化学療法終了後に SUV max が 20% 以上低下した症例はそれ以外の症例と比較し、無増悪生存期間が有意に長かったと報告しているが²、化学療法効果判定における FDG-PET/CT の有用性について検討している報告は少ない。今回の症例では、FDG-PET の所見に一致して化学療法抵抗性の癌細胞が認められており、化学療法の効果判定に対する FDG-PET/CT の有用性が示唆された。

連絡先：戸山友香 〒113-8603 東京都文京区千駄木 1-1-5 日本医科大学付属病院泌尿器科

E-mail: s4036@nms.ac.jp

Journal Website (<http://www.nms.ac.jp/jmanms/>)

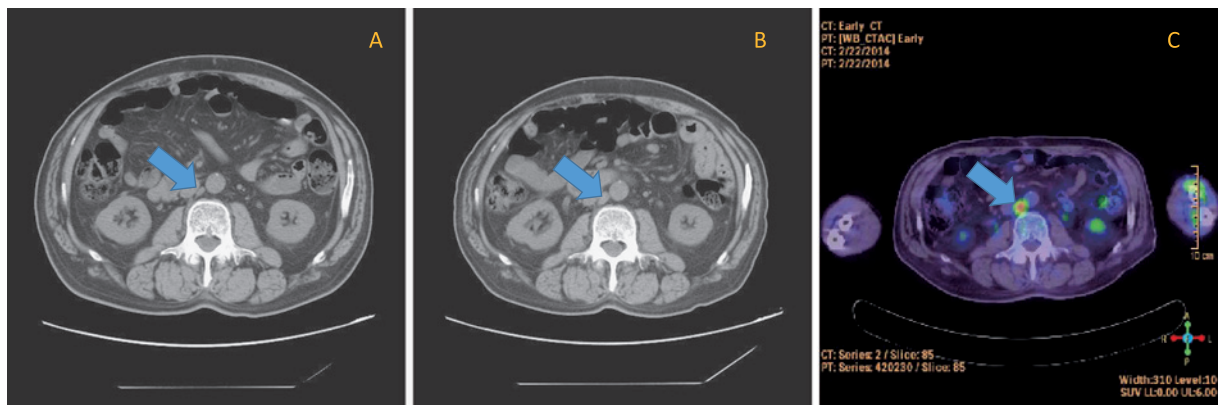


Fig. 2

Fig. 1 A 化学療法施行前, B 化学療法施行後の腹部単純CT C 化学療法施行後のFDG-PET/CT 右腎門部リンパ節腫大は化学療法後著明に縮小し, FDG-PET/CTで集積を認めなかった.

Fig. 2 A 化学療法施行前, B 化学療法施行後の腹部

単純CT C 化学療法施行後のFDG-PET/CT 傍大動脈リンパ節は初診時より明らかに有意な腫脹とは言い難いものの化学療法施行後のFDG-PET/CTではSUVmax6.1と高集積であり, 活動性病変が示唆された.

文献

1. 中井川昇: 上皮癌におけるPET診断の現状. 臨床泌尿器科 2014; 68: 1010-1014.
2. Giannatempo P, Alessi A, Mieli R, et al: Interim

Fluorine-18 Fluorodeoxyglucose Positron Emission Tomography for Early Metabolic Assessment of Therapeutic Response to Chemotherapy for Metastatic Transitional Cell Carcinoma. Clin Genitourin Cancer 2014; 12: 433-439.